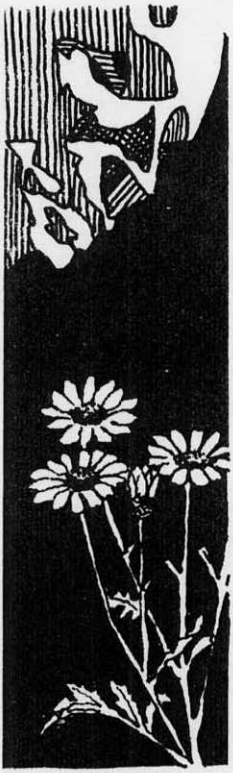
ボールを追う子等の
火のような気合の迸る口
文章に魅せられ
滔々と読誦する口
問題をにらみ
固く歯をくいしばった口

その口から
今朝は歌声が流れる
木曜日の朝、全校の音楽集会
タクトが動く
ブラスバンドが鳴り響く
歌声が湧き起る

つい先刻までの遊びの続きも
すべて忘れて
ひたすらに、周りの声に
自分の声を合わせて歌う
八〇〇人の口から発して歌声は
一つに和して、高根山に響き渡る

昭和54年８月１日
編集／発行
岡崎市教育委員会

（声をそろえて元気よく－竜美丘小）



—教育随想—

現代教育に持つ疑問

クイズ番組に見る若者の知識

河口信一郎

退職以来十年目。在職中より二度の勤めをさらさら考えなかった私は、いま平々凡々の生活を続けている。

閑に困っているだろうとか、勤めを持たないと健康に悪いとかいろいろ言う人もあるが、もともと横着な生まれつきなのか、一向そういうことはない。誰にも束縛されない生活は、快適と言わないまでも結構楽しいものである。

時間的に余裕のある暮しはよくテレビを見る。とりわけクイズ番組は、自分にも頭のトレーニングになると、興味を持っている。

クイズ番組も見て先ず思うことは、現代の若者や子供の芸能関係の知識が、芸能音痴の私には驚嘆に価する程強いことである。しかもこれ等の知識の殆どは、学校教育とは縁のないこと。

一方全くどうかと思うことも中にはある。その一つは歴史、殊に日本史に於ける重要人物や、地理に於ける主要地名を知らないことである。小・中・高と三度に亘って、それらの人物や地名に学校教育で触れたはずのものが多い。

地理や歴史等の教科は、昔は、事の正否はともかく暗記学科と言われていた。しかし現代の社会科の学習がこれを排し、社会の動きとか社会現象の因果関係、自然と人文との関係を重視することは解る。

しかし、因果の要素を確実に把握しなければ、前記のことはできないではなかろうか。かように考えれば当然人名地名常識も当然身につくこととなろう。まして小・中学校時代の子供は暗記力の最も発達する時代である。この点社会科関係の指導に何か欠けているのではなかろうか。

次に格言・ことわざの知識に弱いのも現代若者の欠陥と思う。格言・ことわざの中には封建的道徳の名残りとして、排すべきものも一部にはあろう。しかし、多くの格言・ことわざは、事に当った場合知らず知らずの中に身を律するものが多い。

現代の学校教育に於ては、格言・ことわざ等を指導する機会が非常に乏しくなったようで、これも寂しい気がする。

漢字の知識や国語力そのものが乏しいのも現代若者の欠点と言われている。これらの力をつけると共に、短い言葉の中に処生訓を秘めた格言・ことわざを、学校教育の中に今一度見直すことが必要ではあるまいか。

昔の家庭の躾がよく行われていたのは、こうした格言・ことわざが、家庭内に伝承され実践されたからだと、私は思う。

次に気になるのは動植物を始め、実物を知らなさ過ぎることである。

現代の理科教育の振興はまことに目ざましい。環境の整備・施設の充実、昔を知る者には驚く程である。だのにクイズ番組に出て来る若者・子供は余りにも実物を知らなさ過ぎる。一体どうしたことであろうか。

閑老の所感の一端である。

（元美川中学校長）

ノルウェーの旅

中根利枝子

北欧の夏の夜は短い。コペンハーゲン発の夜行列車から降り立った私たち女三人を迎えたオスロの町は、夏の日射しに白く輝いていた。

自分たちの旅をしたいと汽車の旅を選んだ私たちだが、慣れない異国での夜行列車の旅で緊張した心を解きほぐしてくれたのは木のプラットフォームであった。セメントや石の冷たい感触に慣れた私たちは一瞬、田舎町に降り立った気分を味わった。

オスロは人口五十万人の町である。しかし、四時半すぎに始まるラッシュアワーに電車に乗っても込み合うということはない。勤め帰りの人に混じって、大きな犬を連れた少女が乗っているという光景にしばしば出会った。

ノルウェーの人たちは自然と共に生きることを信条としている。町に住む人々はほとんどの人が別荘を持ち、週末は町を離れ、自然の中で生活する。冷たい湖

ふるさとの山河

扇子山

岡崎市山綱町の南側の山一帯は、稜線がなだらかなカーブを描き、ちょうど扇を広げたように見えるところから、扇子山と呼ばれている。この辺りは遠望峰宮路山県立自然公園に属し、西に桑谷、東に五井の山々が肩を並べて連なっている。

この山は、古くは名取山、大烏帽子ケ峰などと呼ばれたが、徳川家康によって扇子山と改名されたという。

永禄五年（一五六二）、家康は清須で織田信長と同盟を結んだが、これを西郡上之郷（蒲郡市神之郷）の城主鵜殿長照が今川方に内通したため、家臣の竹谷清善に命じて長照を攻めさせた。しかし、戦況が不利となったので、家康は家臣の松井忠治らを援軍として差し向け、自らも兵を率いて岡崎城より出馬し、山綱村の百姓たちの道案内によりこの山の頂上に陣を取った。

この戦いは、松井忠治の家臣である甲賀の忍者たちにより城に火が放たれたため、徳川方の勝利に終わった。これを山頂から眺めた家康は、織田との同盟後の初戦に勝ちをおさめたことを大いに喜び、開運末広がりの意味から、この山を「扇子山」と名付けたといわれる。

扇子山の中腹には、駒ケ滝、牛岩滝と呼ばれる二つの滝があり、雨ごいに非常に霊験あらたかと古くから言い伝えられている。昔から、水不足で村が困り果てた時、この滝に雨ごいをすれば不思議なことに必ず雨が降って危機を免れたという。村の記録によれば、昭和二年、古例にならい雨ごいが行われ、霊験によって雨を得たことがある。

その日村中総出で氏神の青木社（祭神天水分命・国水分命で昔は滝の上に鎮座）で式典を行い、行列を整え滝へ赴き雨を祈願したところ、翌日言い伝え通り、天の恵みを受けたというのである。

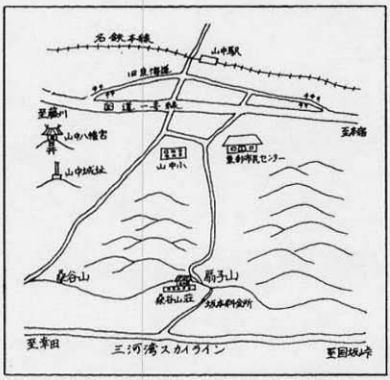
現在、三河湾スカイラインによって交通の便もよくなり、扇子山を訪れる人は数多い。山頂には市営国民宿舎桑谷山荘が、緑豊かな自然につつまれて閑静なたたずまいを見せている。山荘を起点として自然遊歩道が整備され、周りにある森の体育場や展望園地を一巡りできる。

遊歩道の両側はヒノキやマツなどの樹木が生い茂り、濃い緑の影を落としている。木立ちの隙間を縫って吹いてくる風が、汗ばんだ肌にここちよい。木々のさやぎにまじって聞こえてくる鳥たちのさえずりは心をなごませてくれる。

標高四〇〇㍍の展望園地からの眺めは雄大である。南は、渥美、知多半島に囲まれた紺碧の三河湾を眼下に、遠く伊勢志摩をも一望できる。西は三河平野、北ははるか日本アルプスの連峰まで眺望できる。

扇子山は、体力づくりを兼ねながら自然の魅力を堪能できる絶好の野外リクリエーションの場として、今、静かな人気を呼んでいる。

（山中小　倉橋　勉）



アテネ二日目

長坂　正延

さて、本日より自由行動。まず三年前の旅で買いそびれた皮のサンダルを買う。

それにしても、朝の活気のすばらしさ。街中が生きている。スケッチブック欲しさにデパートの場所。聞くも街角のポリスマン、「I don't know.」。さて昼食は立ち食いのハンバーグ。コーラ共で一五〇円。安いものだ。

さあスケッチ。アクロポリス下の、先回も描いた、同じ場所にたどりつく。少しも変ってない。変りようがないといった方がいいのかもしれない。今回はスケッチに精を出すつもりだ。落ちつけて、筆の走りもよい。が、とにかく暑いのには閉口。

地図片手に裸で歩く米国人にはふしぎな光景が、さかんにスケッチブックをのぞく。「Hello.!」「It's very nice.」心の中では何と思っているか。しかし、悪い気はしない。ここは素直にならなくては。とにかく楽しい自由行動の一日だ。夕方、ピレウス港よりエーゲ海の旅へ。

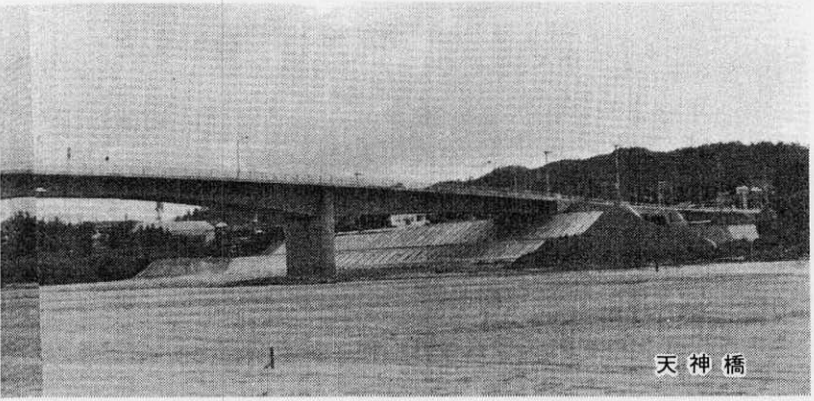
（美川中）

で夕暮れまで水泳を楽しむ人々もいた。時に自然を破壊し、自然に挑戦して生きようとする私たちが見失っているものをノルウェー人の中に見た。

（東海中）

岡崎再見

⑯ 矢作川を下る

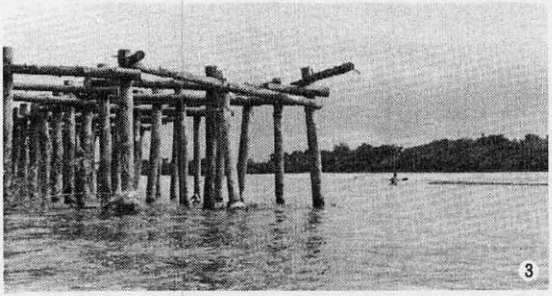

天神橋

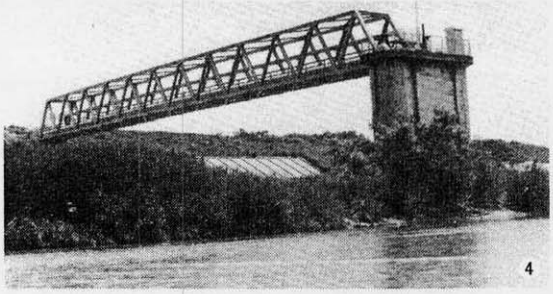
乙川を下って、矢作川を下らないとはおかしいと、「川を下る」の第二回。大きく蛇行しながらゆったりと流れる矢作川を、細川から六ツ美まで二日間かけてカヌー二そうで下る。

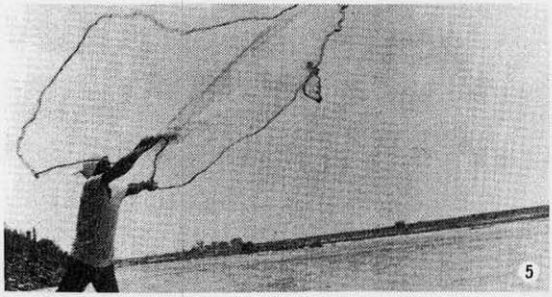
おだやかに見えた流れも、カヌーで下ると、その変化に驚かされる。川の真中でも、カヌーの底が着き動けなくなる程の浅瀬があるかと思えば、吸いこまれそうに深い不気味な流れもある。さらに変化をつけているのが、いくつかの大きな橋である。それに、今や矢作川の風物のひとつとなったサンドポンプ船も浮かぶ。このサンドポンプ船の横を通り抜けるのも一苦労。川の中にワイヤーロープが張ってあるのだから。

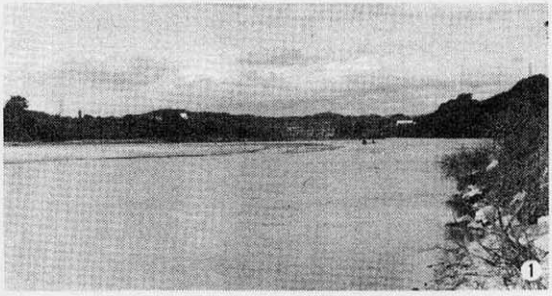
ほっと一息つくと、川辺で羽を休めているシラサギが目に入る。魚も時々はねている。

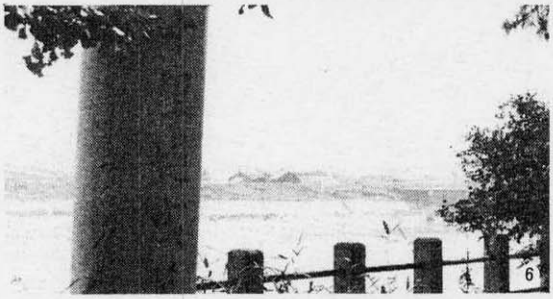
美矢井橋のたもと、大聖寺公園の川岸に無事到着。母なる矢作川は大きく広がった。


3

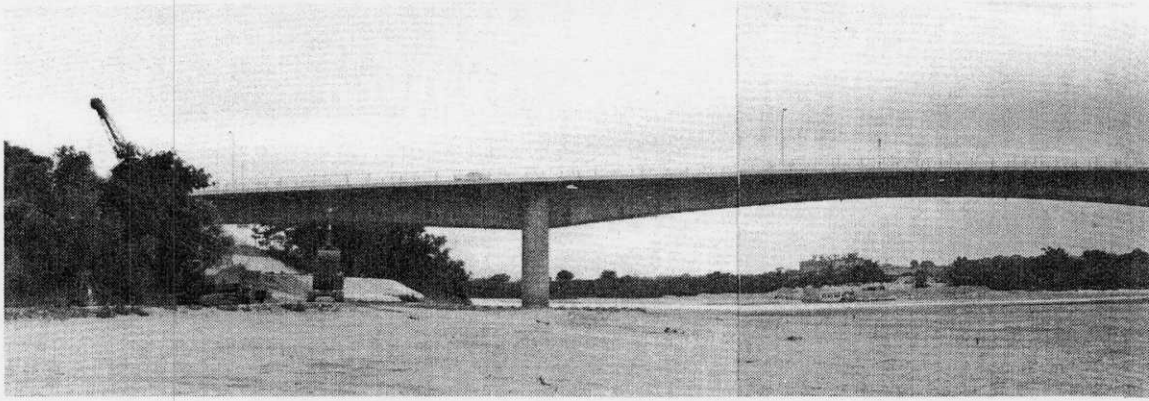

4


5

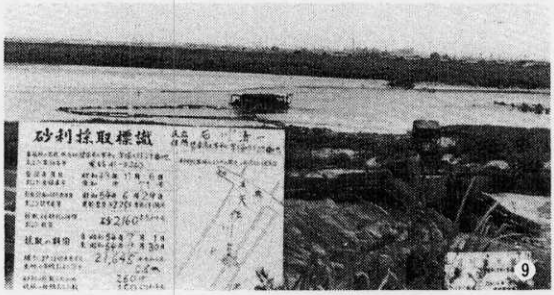

1

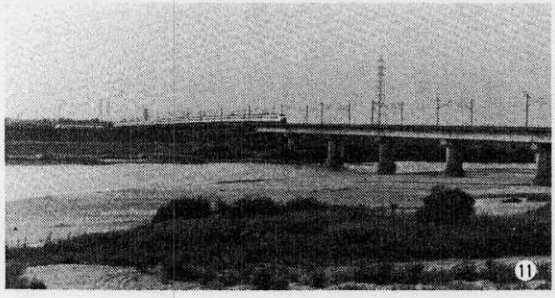

6

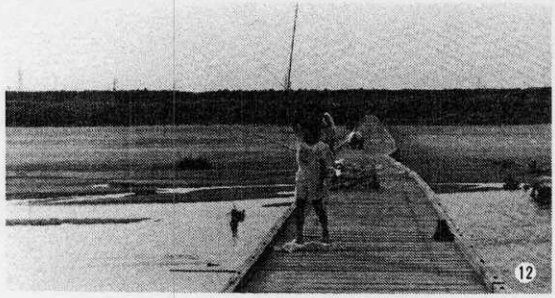
2

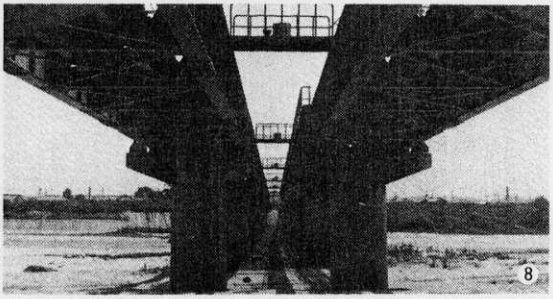


① 巴川が合流した地点から水源のえん堤を遠望する。
② ゆるやかな川面を二そうのカヌーで下り始める。
河口まで三十三粁、零点高二四・九四米地点。
③ 堤防護岸のための防護柵がいたるところで見られる。
④ 工場用水の取水塔。
⑤ 今では珍しい投網を打つ光景も見られた。
⑥ 「矢作川弓張月のかげさして清き流れに千鳥なくなり」の碑が建立されているところから市街地を眺める。
⑦ 昔は東海道、今は国道一号線、矢作橋と岡崎城。
⑧ 幾何模様の美しい名鉄の鉄橋下。
⑨ サンド・ポンプで砂利採取をする。
スタート地点より十四粁、高さ十三米を下った地点。
⑩ 河川敷を利用して、市営運動広場が出来ている。
⑪ 新幹線の鉄橋を過ぎると西尾市にはいる。
⑫ 小川橋（流橋）で魚釣りを楽しむ子どもたち。









教育日々

プラスα

竜谷小　安江千江子

S君。ペルテス病で松葉杖の少年となって一年余。

春の遠足の前日、母親は、

「みなさんの御迷惑を考えると。」

と、同行を辞退する旨伝えて来た。私は、いざという時、背負う覚悟で、

「大丈夫。S君行きたがっていますから遠慮しないで。」

と、胸をたたいた。

当日、途中まで送るという母親との連絡不充分もあって、私とS君は、子供たちと合流できず、迷子になってしまった。

その日の作文にS君は、

先生は、ガードレールによじ登ってみんなをさがしながら、

「先生が迷子になっちゃった。」

と、わらっていました。

……　先生は、歌を歌いながら歩いていました。

……　みんなを待っている間、先生は笛を吹いていました。

と書いている。

その時、四月以来、まともな日の全然ない私は、「ドジ、ドジ。」とまた笑われるだろうと案じたり、S君を寂しがらせまいと思ったりして、どうしたらよいのかと心配ばかりだった。

やがて、百二十名の到着。

「先生たち、もう来てたのか。早かったなあ。」

いちばん早く走り寄って来たK君。そしてかばうように学級の中に連れていってくれた。

それ以来、K君はS君のガードマンの役をかってくれた、去年、階段で押されて怪我をしてから、集会参加を拒んでいるS君。K君のいちばん活躍するのはこの集会のある朝だ。S君の側にピッタリついて、誰かがそばに寄ろうものなら「なんだあ。」と怒りの表情でにらみつける。そしてS君と狼籍者との間に入って、階段を降りきるまでゆっくりついていく。

私の失敗がK君の優しい気持ちをさそい出したのか。それ以来、学級の子供たちの目も温かさを増したようだ。

教師としての責任を回避しようとする下心も、S君を集団の中に引きずりこんで、善玉ぶろうという気持ちもないが

「ひとりも悲しい子がいないような学級にしよう。」

という私の訴えが、子供たちの心のどこかに、素直な形でひっかかってくれているような、そんな気がする。

わが陸上部

常磐中　中村　吉史

「先生、きょうどこまで走るゥ？」毎朝わかっているのに聞かないと気がすまないらしい。わが陸上部総勢四十五名（なかなか全員そろわないが）、始業前の朝練習の始まりだ。学校を出て、青木川沿いにランニング。滝山寺仁王門までの仁王門コースは、往復約一、五キロ、もう少し下って、大きな石燈籠までの常夜燈コースは約二キロ、冬の駅伝大会が近づいてくると、三キロ、五キロと距離はのびる。

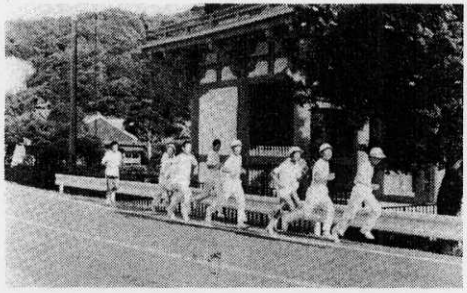
常中へ来て二年目。全校生徒百八十余名。部活動は、運動部ばかり全部で七つ。そのうち、男女の陸上部を受けもち、去年一年間は、ようすもわからないまま、頼りない顧問で過ぎてしまった。それでも前の顧問の先生の指導がよかったおかげで、何とか陸上部の面目を保っていたが、三年生がいなくなってしまうと、もうこれといった選手もいなくなってしまい、影のうすい陸上部となりそうであった。

部員も、あまりやる気がなく「これぐらいやれば、まあいいだら。」と、すぐ自分を甘やかしてしまうところがあった。それに輪をかけて、体育館ができ、もともと猫の額ほどだったグランドがますます狭くなり、ダッシュは四十メートルがやっと、ハードルは三台しか並べられず幅とびは、助走路が途中でカーブする、と陸上部にとっては、大変やりにくい状態となってしまった。

こんな状態をぬけ出そうと、とにかく意欲を持たせ、やる気にさせること、これが一年目の目標となった。

そこで、まず生徒たちの中へ入っていって、一緒にやりながら指導をしていくことにした。内側から生徒たちを盛り上げようと考えたわけである。もともと陸上部の経験のない自分には細かい技術指導はうまくできないので、一緒に走り、生徒と競争して、走る楽しさを体で感じとらせたかった。

おかげで健康そのもの。生徒とのスキンシップもでき、生徒たちのやる気も出てきて、走る楽しさいっぱいの陸上部である。



おしらせ

【寄贈刊行物・資料等】

◇岡崎市文化財目録　第一集

岡崎市教育委員会編

昭和五十四年三月三十一日現在で市内の指定文化財の史跡、建造物、石造建造物、天然記念物、無形民俗文化財及び有形民俗文化財で、おおむね指定の古いものから写真を主体に掲載されている。B5版・八十二頁

◇殉国編

学校新聞「ひがし」別冊

岡崎市立常磐東小学校編

日清・日露の戦役以後の常磐東学区内の戦死者ひとりひとりについて状況を調査してまとめたものである。

B5版　三十五頁

◇愛宕の子ども　第十四集

岡崎市立愛宕小学校編

B5版　百六十八頁

■ビルマの流れ星加藤見文著

著者は、東部給食センターに勤務されている。その著者が、ひょんな事からビルマに四年という歳月を過ごされた。その間、誠に数奇な運命をたどり生きて来られたものを追憶しまとめられた。結びで、著者は「私は声を大にして叫びたい。再びこのようなことのないことを。」と。

B5版　二百四十頁

棟方志功展とハンガリー少年少女合唱団

国際児童年にふさわしい催しふたつ

芸術の秋に先駆けて、八月十日から二十六日まで美術館で、土着の生命と美の謳歌・棟方志功展を開催。

棟方板画館の協力を得て同画伯の初期から晩年に至る代表作品が展示された。

「大和し美し板面柵」「女人観世音柵」「釈迦十大弟子」などの代表作や大作、それに倭画、書なども展示され、〝世界のムナカタ〟の激しく個性あふれる作品に深い感銘を与えた。

なお、国際児童年記念として一般入場者同伴の小・中学生二名までは無料となり、親子連れの参観者も多かった。

八月十八日（土）には、国際児童年を記念して、ハンガリーが誇りとする世界的な少年少女合唱団が市民会館で公演。「子らよ、共に歌え」ほか十数曲を歌い、岡崎の小・中学生も「羊飼い」「気球に乗ってどこまでも」など共演した。

子ども本来の声を大事にした自然の美しい歌声に聴衆はうっとりとさせられた。

ハンガリー少年少女合唱団はハンガリー国立放送局の専属合唱団として設立され、その指導には、ラスロ・チャーニー博士と同夫人のワレリア・ボトカ女史が当たっておられる

なお、博士ご夫妻は、岡崎の子どもたちの歌声に大変感心され、公演終了後、岡崎小学校を親善訪問され、歌による楽しい交歓会をされた。

●第二回ラ・ポーラ資金美術教育振興　**岡崎市児童・生徒優秀作品展**　八月八日～十二日　ラ・ポーラにて

●国際児童年記念　**岡崎市小・中学校児童・生徒作品展**　八月九日～十九日　岡崎ショッピングセンター　レオにて

●**生徒模擬市議会**　八月十日　岡崎市議会場

●**新任教員自主研修会**　八月三・四日　岡崎少年自然の家

昭和五十四年度　夏季実技講習会

国語	八月一日	九十名	半田市
書写	八月一日	五十名	葵中学校
社会	八月一日	五十五名	市内巡検
算数・数学	八月一日	三十名	六ッ美市民センター
理科	八月一日	四十二名	竜美丘小学校
音楽	八月一日	五十名	岡崎小学校
図工・美術	八月一日	百名	甲山中学校
英語	八月二日	四十名	河合中学校
技術・家庭	八月二日	四十名	竜海中学校
家庭	八月二日	四十名	秦梨小学校
学校保健	八月一日～二日	百六名 五十五名	医師会館 市役所　六階
特殊教育	八月二日	三十名	福祉センター
視聴覚	八月一日～二日	五十名 六十名	矢作市民センター 連尺小学校
学校図書館	八月二日	六十名	市図書館

所在地—岡崎市十王町

高岩（たかいわ）跡

市役所前の菅生川にかかる吹矢橋の北側のたもとから少し下流に、高岩と呼ばれる一群の岩があった。流れる水の青さと岩にあたってくだける波の白さ、それに岩の上に生い茂る草木の緑とあいまって、景勝の地となっていた。

この高岩には、日本武尊や菅生神社にまつわる話も伝わっているが江戸時代になると、少し下流に満性寺土場が築かれ、川舟から荷を積み降ろす舟着き場としてにぎわい、高岩の上にも弁財天と地蔵尊が祭られた。しかし、何度も洪水により流されたことや護岸工事のために、明治になって百五十メートルほど下流の堤防沿いに移された。そこには今も、建立当時の地蔵尊と江戸時代末期の様式といわれる弁財天が安置されている。

高岩も工事のためになくなり、今では、水難のため亡くなった人々を供養するため江戸時代に建てられた碑が残されているだけである。

＊

●カット　三島小　宇野友啓

この本を

○**太陽の子**　灰谷健次郎
理論社　¥ 1,200

○**アメリカ人の発想・日本人の発想**
竹本健一 加瀬英時 ハーバードパッション　徳間書店　¥ 890

○**峠の道**　森田　宗一
匠文社　¥ 1,700

○**巻頭随想**　文芸春秋編
文芸春秋社　¥ 380

○**話のたね**　池田弥三郎
文芸春秋社　¥ 340

○**宮中歳時記**　入江　相政
P.B.S　ブリタンカ　¥ 1,200

○**銀行50億強奪犯の堀った奪った逃った**
アルベール・スパジアリ 榊原晃三訳　新潮社　¥ 1,360

○**さまざまな自画像**　井上ひさし
中央公論社　¥ 850

○**野づらは星あかり**　住井　すゑ
新潮社　¥ 1,200

○**火**　熊谷清一郎
岩波新書　¥ 320

オアシス

泳いでは昼寝をしていた子供の頃の夏休み、母親が出してくれたスイカにぱくつくのも楽しみのひとつだった。

腹痛をおこすたびに、寝冷えしたとかスイカの食べすぎだとか小言を言われたのも休みのことだ。

気ままな毎日だったが、子供心に何か充実感を味わうこともできた。

「暑中お見舞い申し上げます。ぼくは、今アメリカの友達の家で最後の夏休みを過ごしています……。」

海の向こうからの教え子の便りが、暑さでぐたっとなっている私に、一ぱいの清涼飲料を届けてくれた。

〝みんな！暑さなんか負けるなよ！〟と便りに綴り、声援をおくりたい。

あさ、いつも思うこと。きょうは、叱言のない日にしよう。子供たちを帰して思うこと。やっぱり、きょうもだめだった。子供達は七夕のたんざくに「せんせいにおこられないようになろうね。」子供も担任も思うことは同じなのに。

すんでの所で、転覆。カヌーくらい何とかなるさと、乗ってみたのが運の尽き。同じ所を回るばかりで、思い通りに進まない。あせると、グラッ。サンドポンプ船から、人の声。「なかなか大変だなあ。」「まあ、おもしろいよ。」と私。矢作川の川面を渡る風が、涼しく感じられた。